春雨物語序説

——諸本研究史の試み——

木越　治

一、諸本研究のために

現在、一般に流布している『春雨物語』の注釈書類についてみると、少なくとも三種類の本文作成方法のあることがわかる。その違いは、「宮木が塚」「歌のほまれ」「樊噲」の三篇に集中しているのであるが、それらを分かりやすく表にしてまとめると、次のようになる。

	A	B	C
序	富岡本		
血かたびら	富岡本		
天津処女	富岡本		
海賊	富岡本		
二世の縁	文化五年本		
目ひとつの神	富岡本		
死首のゑがほ	文化五年本		
捨石丸	文化五年本		
宮木が塚	文化五年本	天理巻子本＋文化五年本	文化五年本
歌のほまれ	文化五年本	天理巻子本	文化五年本
樊噲上	富岡本	富岡本	文化五年本
樊噲下	文化五年本	天理巻子本（冒頭数行）＋文化五年本	文化五年本

Aは、重友毅氏『上田秋成集』（日本古典全書　朝日新聞社　昭和33年2月刊）や浅野三平氏『春雨物語』（全対訳日本古典新書　創英社　昭和56年5月刊）など、Bは、中村幸彦氏『上田秋成集』（日本

古典文学大系　岩波書店　昭和34年7月刊）にはじまり、中村博保氏『春雨物語他三篇』（日本古典文学全集　小学館　昭和48年2月刊）などに受け継がれている。Cは、目下のところ美山靖氏『春雨物語　書初機嫌海』（新潮日本古典集成　新潮社　昭和55年3月刊）のみである。

これらの違いの根本にあるのは、天理巻子本をどう位置づけるかという問題である。Bの方針は極めて明快で、巻子本を富岡本と同じく最終稿に属するものとみなし、可能な限り底本として用いようとしている。これに対して、Aは、古典全書本の解説によってみる限り、巻子本をそれほど重視しておらず、単に初期の草稿とみなしたもののようであるが、そのあたりいまひとつはっきりしないところがある。一方、Cの場合は、凡例に

『春雨物語』は、……西荘文庫旧蔵本を底本とした。ただし、「序」「血かたびら」「天津をとめ」「海賦」「目ひとつの神」の本文のみについては、最終稿本と目されている、いわゆる富岡本によった。その場合も、題名・排列順序は西荘文庫旧蔵本にしたがった。

なお、富岡本には「樊噲上」も含まれているが、後半部との整合を考慮してあえて採らず、西荘文庫旧蔵本の本文で通した。

とある。すなわち、完本である文化五年本を底本に選ぶというのが基本方針で、例外的に「序」～「目ひとつの神」は、最終稿である富岡本を用いたが、「樊噲」上については、一作品として完結していないから採らない、という方針であるらしい。しかし、Cの場合、「宮木が塚」の頭注に「底本以後の改稿の断片」としてしばしば巻子本の内容を紹介していることからみて、巻子本を単なる初期の草稿と考えていないことは明らかであるにもかかわらず（巻子本の「宮木が塚」や「樊噲」下を用いなかったのは、一作品としての完結性を重んずるその方針からして当然だとしても）首尾完結している巻子本「歌のほまれ」を用いなかったのはなぜか、という点に疑問は残るのである。その意味で、このCの方針も納得できるものとはいいがたい。

ともあれ、こうしてごく一般的な『春雨物語』の注釈書についてみていくだけでも、本文の問題は、解決ずみであるとはとても言えないのである。まして、底本として用いられることのなかった佐藤本や天理冊子本などの草稿群になると、細部にまで踏み込んだ検討はまだまだ不十分である。私は、こうした草稿群を通してうかがいうる改稿のプロセスすべてが、総体としての『春雨物語』を形成していると考えるものであるが、この点に関する限り、十年前の拙稿「『春雨物語』の成立―稿本群の検討を通じて―」（近世文芸　第24号　昭和50年10月）よりそれほど大きく進んでいるとは思われないのである。

ただ、幸いな事に、この間、富岡本・天理巻子本・漆山本などの影印、佐藤本の翻刻などが公刊され、本誌前々号における天理冊子本の翻刻を合わせれば、各稿本を見渡すことは、きわめて容易になったといえる。こうした状況を踏まえて、『春雨物語』諸本の研究史をたどりながら、各稿本について問題点の整理と検討を行いたいと思う。そのことがすなわち、前々号で予告した天理冊子本の性格を明らかにすることにもつながると考えるからである。

二、諸本研究史の試み

（1）佐藤本の出現まで

『春雨物語』が初めて活字で紹介されたのは明治四十年のことである。藤岡作太郎校訂『名著文庫　春雨物語・癩癖談』（富山房刊）がそれで、この時底本となったのは、序・血かたびら・天津処女・海賊・目ひとつの神・樊噲上から成る富岡本五巻であった。が、馬琴の『近世物之本江戸作者部類』を引くまでもなく、この稿本は『春雨物語』の完全な姿を伝えるものではなかった。そのため、長い間この富岡本を補う稿本の発見が期待されていたのである。

それが最初に実現されたのは昭和十七年十一月十八日付の朝日新聞紙上に掲載された佐藤本発見の記事であった。そして、この記事の末尾には、発見者である佐藤春夫の手によって、草稿の整理が完了した暁には、その内容が公表される予定である旨記されていた。しかし、その約束は果たされずに終わり、結局この稿本は、昭和三十九年に佐藤春夫が没する直前まで彼の手元に置かれたままになっていたのである。こうした不幸な事情のために、この稿本は早くから知られていたにもかかわらず、本格的な紹介は最も遅れることになった。昭和四十二～四十三年にかけて浅野三平氏によって紹介されるまで、佐藤本についての情報はこの新聞記事以外にないという状態が続いたのである。しかし、だからといって、今ここでその新聞記事を取り上げ、その内容の杜撰さをあげつらってもしかたがないであろう。よって、ここではそうした事情を確認しておくにとどめ、佐藤本については、浅野氏による紹介のところでくわしく取り上げることにしたいと思う。

（2）天理本の出現と紹介

天理本が最初に紹介されたのは、藤井乙男氏「秋成雑俎　蟹のはらわた（一）」（国語国文　昭和18年11月）においてである。その冒頭には、

　昨年天理図書館に入った秋成の歌文稿一束数百枚はもと荷田信美の家から出たもので、乱雑に書きなぐった草稿を順序もなく取重ねられてゐたのを、同館の司書中村幸彦君が丹念に択りわけて、種類をわかち前後を調べ、十二本の巻子と三冊の袋綴に整理されたものである。

とあって、旧蔵者（正確には、古典大系本の解説に記されているように荷田信美の次男重村の養子に入った松室家）や入館当時の状況などが簡略に記されている。『春雨物語』については、

　春雨物語は初稿本とおぼしく、血かたびら、天津処女（稿本二種）、海賊、妖尼公、目ひとつの神、二世の縁、樊噲、楠公雨夜がたり、捨石丸、宮木冢、題名不明（定介といふ庭掃男の話）の十篇を揃えながら、全章僅かに三枚半に過ぎぬ妖尼公の他はすべて断簡残章である。

と述べられている。

ここでまず気が付くのは、巻子本に含まれているはずの「歌のほまれ」がないこと及び「天津処女」に（稿本二種）と注記されていることである。しかし、「歌のほまれ」が『春雨物語』の一篇である

と認められるのは、文化五年本の出現以後であることを思えば、この時点で、この短いエッセイを『春雨物語』中の一篇と想定することはかなり困難であっただろうことは容易に想像がつく。また、「天津処女」に関しては、「血かたびら」の末尾から「天津処女」の最初にかけて、冊子本の本文に重複が多く、文章的にも若干の出入りがあることをもって、二種の稿があると考えたものと思われる。（ただ、私としては、この違いは、佐藤本「血かたびら」のように、時期的な前後関係を明瞭に指摘できるほどのものではなく、同時期における異文と考えておけばいいと思っているが）

それ以上に、冊子本と巻子本が単に形態上の違いとして扱われ、本文としては特に区別されていないことの方が重要である。しかも、この後に翻刻されている「妖尼公」及び「宮木が塚」の底本の選び方でみる限り、巻子本よりも冊子本を重視しているという傾向がみられるのである。もっとも、「妖尼公」については、「この一篇だけが珍しく完備しているので、こゝに挙げておく（なほ天理本にこれよりも文章の長く詳しい断片もある）」という注記があるから、冊子本が選ばれたのは、唯一首尾整った稿であることが大きな理由となっているともみられる。が、「宮木が塚」の場合は、もっと積極的に冊子本の本文が選ばれているのである。その翻刻の状況を詳しくいうと、

1、冒頭→「…いさゝかの罪かうぶりて」までは巻子本を採用（この部分、冊子本は欠）。

2、「司解し…」→「…なほざりにのみ過ごしたまへりき」までは冊子本による（この部分は巻子本にもある。これ以後冊子本は長歌の前あたりまで欠）。

3、これ以後は、（以下別本）と注記して、巻子本の本文を、欠ける部分はそのままにして最後まで掲げる。

4、その後に、「又一種、これは物語よりも随筆に入るべきものであろう」と注記して、冊子本の末尾「尸は波に…」以下（長歌は省略）を翻刻。

というふうで、本来なら(1)(2)(3)すべて巻子本で通すことが可能であり、その方が自然だと考えられるにもかかわらず、冊子本の存する(2)の部分のみ特に優先的に冊子本を採用するという処置を取っているのである。こうした態度は、巻子本を最終稿とみなす現在の通説に反するものであるが、これがどういう根拠によるものなのかははっきりしない。しかし、これ以後比較的軽視されることの多かった冊子本の方を重視していることは記憶されてよいと思う。また、冊子本の末尾の部分を随筆的なものとみなしていることも見逃せぬ指摘であり一考に値する。この部分が全て「宮木が塚」と無関係であるとは言い切れないにしても、最後の「又よめる…」以下の一節などは、たしかに一篇の物語の締めくくりとしては、不審な点が多いからである。

全体として、藤井氏による紹介は、簡略なものであるが、冊子本・巻子本の比重の置き方をはじめとして、これから後も考えて行くべき問題が数多く含まれているように思われる。

(3) 中村幸彦氏の研究

『春雨物語』諸本の研究史をたどることは、すなわち中村氏の研究の道程を検討していくことであるといっても過言ではないだろう。今日の『春雨物語』研究の基礎は氏によって築かれたものだからである。しかし、氏の手になる『春雨物語』の解題・解説等に拠りながら、各稿本の本文をつきあわせていくと、おのずからいくつかの疑問が浮かび上がってくる。それは主として、各作品の底本として採用されなかった諸稿本をどう位置づけるか、という点に関している。以下、この点を中心に、年代順に氏の研究をみてゆきたい。

(a) 春雨物語のこと(上)(下)

中村氏が『春雨物語』にふれた最初は、「春雨物語のこと(上)(下)」(学海 第2巻第8号・第3巻第2号 昭和20年12月・同21年3月)である。天理本と富岡本、それに佐藤本に関する新聞記事によって、『春雨物語』の成立過程と最終の姿を想定しようとする点では、次項で取り上げる積善館版『春雨物語』解題と重複する部分が多い。しかし、天理本の紹介についてみるかぎり、この段階では藤井氏と同じく、冊子本・巻子本の区別はされていないのである。いささか長い引用になるが、その紹介の部分を引いてみよう。

今一つは佐藤本と前後して天理図書館に入った秋成自筆反古二百枚程の中で、同じ書き様の数十枚を整理するとそれはやはり春雨物語の草稿であった。これは藤井紫影博士が雑誌「国語国文」(昭和十八年十一月号)に御紹介下さった。これは各篇共に断片で完備したのは一篇。しかしかつては整備していたと見え後人の序が一枚そなはって居る。所収の篇の名は紙の継目等に従い順序を立てゝいふと、血かたびら、天津乙女、妖尼公、目一つの神、二世の縁の五つは初めから順にならび、内容の年代順に従ったもの、如くである。順序不明では、海賊、宮木冢、楠公雨夜がたり、捨石丸、はんかい、題不明(長者長屋か)一篇で、計十一篇外に宮木冢、妖尼公の推敲を経て文章整然たる一群と拾之下樊噌とした一葉とがある。この天理本にあって富岡本にないのが、妖尼公、宮木冢、楠公雨夜がたり、二世の縁、題不明(長者長屋か)、捨石丸の六つ、佐藤本にないのが妖尼公、宮木冢、楠公雨夜がたり、二世の縁の四つ、佐藤本にあって天理本にないのが、題不明を長者長屋なりとすれば茶神の物語と壬申の乱の二つとなる。天理本と富岡本を今照合するに、天理本の方文章精練をかきまゝ改訂加筆があって、富岡本がその改訂に従って居る等、富岡本に先行する草稿であることは明かである。又全篇を集めて書名を附したあともなく各篇の順次を定めて番号を附すといふこともなく佐藤本に比しても天理本はより早い草稿らしい。先ず初稿天理本二稿佐藤本、最終富岡本の順がなり立つ。

このように、巻子本と冊子本は特に区別されず天理本として一括されているわけであるが、しかし、(下)における成立事情についての考察のなかには、

考へれば天理本の樊噲拾之下や別稿の宮木冢は富岡本の一部であって什之上とある樊噲上に応じ、缺けた部分を補ふ。富岡本は早くから缺けてわかれたのではなからうか。これ又全くの想像である。

という一節もあって、巻子本にある「宮木が塚」や「樊噲」に関しては富岡本のわかれとみなすべきであるという考え方はすでに示されている。が、いずれにしても、（下）の冒頭にある「捨石丸」の翻刻において冊子本と巻子本か区別されていない例に示されているごとく、今日のように形態上から両者を区別して行くというふうにはなっていないのである。

このほか、さきの引用の中で「血かたびら」から「二世の縁」までを一続きとみなしていることにも注意すべきである（この点は積善館版解題にも踏襲されている）。これは、冊子本二十五オの「妖尼公」の始まる前にある四行分を「天津処女」の末尾の部分とみなしたことによるものである。また、「題不明（長者長屋か）」とあるのは、後の各篇ごとの記述によれば、巻子本にある「二世の縁」の中間部断片であり、「妖尼公の推敲を経て整然たる一群」というのも、やはり巻子本「妖尼公」をさすようである。この「妖尼公」については、

妖尼公は完備した唯一のもので藤井博士が御紹介すみである。そしてこれよりも更に別稿で描写の精密が加へられ、それ以上に推敲されたものが既に鹿田本胆大小心録に入って世の知る所である。

と記されていて、この作品の場合は、冊子本→巻子本→胆大小心録という改稿のプロセスが考えられているわけである。このほか、「妖尼公」「楠公雨夜がたり」の腹稿についても初期の草稿としてふれられており、「歌のほまれ」についても、「鴛央行」との関係で、

爰に秋成らしい鴛央行なる好もしい一篇は、その所論にも見え、天理本宮木冢別巻にも「歌のほまれ」と題して附されてゐて、やはりこの頃の作である。この篇がどうして春雨物語に入らないとは云へぬ。問題の解決は一応富岡本の原本と鴛央行の原本の書き様の比較検討にかゝるが、そこ迄未だ手が及んでないことを恨む。

と書かれている。が、巻子本にあるはずの「死首のゑがほ」の末尾一葉については全くふれられていない。

全体としてこの論文は、次項で取り上げる積善館版解題の準備稿的な性格をもっているようで、整理途中の稿本に関する中間報告的意味をもつものと思われる。

（b）　積善館版『春雨物語』解題

昭和二十二年四月に積善館より刊行された『春雨物語』の解題は、文化五年本の出現以前に書かれたものでありながら、今日でもなお『春雨物語』研究の基礎的な文献としてゆるぎない位置を占めている。現在では、『中村幸彦著述集』第十四巻「書誌聚談」（中央公論社　昭和58年3月刊）にも収録されていて、容易に見ることができる。

この解題に関しては、なによりもまず、巻子本と冊子本が明確に

区別されていることを挙げねばならないだろう。まず、冊子本の方については、

冊子をなすべき断片を、そうした順序を追っていえば、後人の附したかと思われる「序」一丁、「血かたびら」が巻頭らしくて十丁、つづいて「天津処女」は重複する部分もあって九丁、次に「妖尼公」四丁、「目ひとつの神」七丁、ついで「二世の縁」が二丁あるが、これは全く重複している。以上が大体配列順の明瞭なものであり、中に、「妖尼公」「目ひとつの神」の二篇は完備している。外に順序不明なれど、同書中とみとめられるもの、「海賊」四丁、ただし重なる部分がある。題不明なれど富岡本に比較して「樊噲」上にあたる部分五丁に、「楠公雨夜がたり」三丁、題不明で「捨石丸」という男を主人公とする佐藤本の「捨石丸」にあたるもの四丁、宮木なる神崎の遊女のことを書いた五丁、これは巻子の方に「宮木が塚」なる篇名を附したものがあって、同じ篇の草稿と判明する。それから全然、見当のつかぬもの一丁、しかしそれは或は「二世の縁」の一部かとも思われる（補、後この一丁を巻子本に移す）。別に、半紙で、「楠公雨夜がたり」と「妖尼公」の腹案をはしり書いたようなのが、各二丁と一丁とあり、以上計五十八丁である。なお「天津処女」を書いた一丁のうちには序の草案がしたためられている。これをとりあえず一冊子に製本した。（引用は著述集による。（　）内は著述集収録にあたって補われたもの）

とある。もと冊子本にあった「二世の縁」の中間部断片が後に巻子本に移された事情は、冊子本の翻刻中にあった貼紙等によっても明らかであるが、そのことを除けば、他はすべて現在の冊子本そのままである。巻子本についても、

巻子をなして居たと思われるのは、「歌のほまれ」という後述の「鴛央行」と同テーマの文章につづいて、「宮木が塚」と題する一篇の前半が一巻をなす。巻首の部分は欠けているが「宮木が塚」の後半と思われるものが又一巻をなす。これは前の冊子本中五丁ある遊女宮木のことを記したものと同じく、更にそれを推敲したものであった。外に巻端に拾之下とあるもの一葉、これは言わずとも「樊噲」下にあたる。内容から見て冊子本の「捨石丸」の別稿と思われる二断片に、全然題名不明のもの一葉、従ってそれは『春雨物語』の一部であるか否かもわからない。ただし小説の断片には相違ない。それに「妖尼公」の冊子本所収のそれよりは一段と詳密に叙述されたもの、これは重複した部分もあるが、数片ある。便宜上これをも又一巻に製した。

とあって、ここにいう「全然題名不明のもの一葉」というのが文化五年本の出現によって「死首のゑがほ」末尾の断片であることが判明したこと及び前項注記のごとくのちに冊子本から「二世の縁」の中間部断片が移されたことを付け加えれば、この引用部分はそのまま現在の巻子本についての解説となる。すなわち、天理本に関しては、前二項でみたごとき未分化な状態を経たのち、ほぼこの時点で、巻子本・冊子本の区別が確定し、整理が終わって現在に至っているわけである。

では、これら天理本二種と富岡本及び佐藤本との関係はどのように考えられているか。これについては、まず、富岡本、天理巻子本、

佐藤本がいずれも巻子であるゆえをもって、「同時に書かれた連の別れ別れになったもの」という可能性が考えられている。ただし、実際には、

「什之上」と巻頭にあったという富岡本「樊噲」上と、「拾之下」と現にある天理本同下は、対をなすとも思える。富岡本で、上下の空白が広く、やや細字の「海賊」と、同じ書きぶりの天理本、「歌のほまれ」「宮木が塚」と、ただしこの巻端には番号はなかった。大きな文字が間に混じて上下の空白の狭い富岡本の「天津処女」と、同じような天理本、「捨石丸」とも、同じ頃の筆と考えれば考えられる。佐藤本に就いては、もし全部が同じ書きざまであるとすると、富岡本、天理本と重複するものがあって、別の時に書かれたものとなり、連とはならない。各々書きざまを異にする場合にのみこの問題の中に入って来る。そして富岡本と佐藤本の重複した部分について見ると、新聞の写真で不明瞭であるが、そこに掲げられた「血かたびら」の書きざまは、大きな文字を、早い勢で筆を走らせてあって、富岡本の「血かたびら」の、かなり丁寧に、線のある用紙に、整正に書き初められたのに比して、佐藤本の方が富岡本に先立った稿であることを物語っている。常識的に考えて、秋成の墓もあって、彼について全然無智だったと考えられない西福寺で襖の下貼に用いられたのは、更に稿を改めたものがあったからだとも、或は既に反古と認められる状態にあったからだとも想像されて、兎も角巻子として持伝えて来た富岡本の方が、佐藤本に比して、ある意味の浄書本であるだろう。天理巻子本も亦、富岡本に対して佐藤本と同じく、草稿と考えねばならぬ部分もあるかもしれない。

とあって、天理巻子本の「樊噲」下「宮木が塚」「歌のほまれ」「捨石丸」などは富岡本と対になる稿であると考えられているが、佐藤本や天理巻子本の他の篇については、むしろ富岡本に先立つ草稿と考えられているのである。

では、冊子本についてはどうか。

天理冊子本を、富岡本や天理巻子本に比較するに、「妖尼公」の腹案は勿論のこと、巻子本の「妖尼公」は、今『胆大小心録』に治められている、それに比して大差はないけれども、冊子本の方はかなりに簡略である。冊子本で最も体を整えている「血かたびら」「天津処女」の二篇にしても、富岡本の所収のそれに比して、雑な点が目立ち、重複の部分で、補正された点が、富岡本の本文になっている所から見ても、冊子本は、富岡本にかなり先んじた草稿であった。「海賊」「目ひとつの神」の二篇は、筋こそ同一であれ、その描写も、論旨も、頗る簡単で、文章にいたっては、富岡本に於いて面目を一新している。序の如きもかなりの相違があり、冊子本から富岡本や、巻子本にいたるの間、尚一、二回の補修があったものと推量出来る。そして佐藤本のある部分、「血かたびら」の如きは、この間の補修本と考えられる。佐藤本には冊子本にはみられない順序づけがほどこされているのもその一証となろう。

これによれば、天理冊子本は、富岡本や天理巻子本はもちろんのこと、佐藤本にも先立つ草稿とされている。全体として佐藤本は未見

であるがゆえにかえって重視される傾向があったように思われるが、その点は（1）でのべたごとき事情もあることゆえここでは問題にしない。また、富岡本・巻子本・冊子本の三者を比較すれば、この段階では、冊子本が一番の草稿と位置づけられるのも自然なことといえる。ただ、各篇ごとの記述のなかで、「海賊」「目ひとつの神」の成立時期及び稿本相互の関係について言及したなかにいささか気になる箇所がある。その部分を引いてみる。

［海賊］

尚この「海賊」の製作年代を推察する鍵はあるのである。それは本篇にも見える『万葉』の考証が、同じくのって居る秋成の著述寛政六年の『万葉集会説』、寛政十二年の『楢の杣』序例、文化元年の『金砂剰言』、極晩年と推定される『史論』等を配列し、その発展進歩の段階を見きわめ、この「海賊」中の所説が、どれに最も近いかを吟味する方法である。……これによりて考えるに富岡本のこの篇は、『楢の杣』のなった寛政十二年四月の後、『金砂』のなった文化元年正月より前に書かれたと決定してよいであろう。……富岡本に先立った天理冊子本は遺憾ながら、前後のみ残って、中心をなす今問題の部分を欠く故に、何時頃と定めがたいが、恐らくは寛政十二年四月の前後に天理冊子本の如きがなって、文化元年正月やや以前に富岡本の形をとって居たのである。……ここで天理冊子本所収の「海賊」の成立を寛政十二年前後と見れば、同体裁にしたためられ、既にやや整備した「血かたびら」「天津処女」の二篇は、その頃より先に書出されたことは明らかになるのである。

［目ひとつの神］

今天理冊子本におさまる、「海賊」及び「目ひとつの神」の二篇を、これが補修された富岡本の各々とその補修の度を比較して見る時に、それは「血かたびら」「天津処女」の二篇に比して甚しいものだとは前述したが、一々例示することは出来ないけれども、ほぼ同程度であって、内容にも共に文学論があって相似たこの二篇がほぼ同時に補修されて行ったものなることは疑いないと思う。……その成立は「海賊」と同じく寛政十二年前後に天理冊子本がなり、富岡本の姿になったのも同じく亦文化元年の頃であろう。私はここで補修の甚しいことを言ったが、それは文飾の上についてであって、内容や構成の大体は既に天理冊子本に出来上がっているのである。

この記述によれば、冊子本の「血かたびら」と「天津処女」の本文は何度か推敲過程を経たもので、富岡本により近い本文をもっているが、同じ冊子本でも「目ひとつの神」の方は、「海賊」と同様に初稿に近い状態のもので、富岡本の本文に至るまでにはなおかなりの補修を経なければならぬものであるというのである。冊子本の「海賊」を初稿と認定するのは異論のないところであろうが、「目ひとつの神」についても同じことがいえるかどうか。「共に文学論があって相似」ているというだけでそのように判断するのはいささか早計にすぎるのではないかと思われる。私としては、冊子本「目ひとつの神」は同「血かたびら」「天津処女」と同程度かあるいはそれ以上に富岡本に近いと断定していいと考えている。また、そうでないと、冊子本において、「血かたびら」「天津処女」「妖尼公」「目ひとつの

神」「二世の縁」の五篇がこの順で配列されていることの説明がつかないのではないかと思う。このことは、文化五年本を介在させて比較してみればよりはっきりするはずだが、単に富岡本と冊子本を比較しただけでもいえることだと思うのであえてここで問題にしておく次第である。

なお、この他にも、「妖尼公」「宮木が塚」「歌のほまれ」等の項で各稿本についての言及があるが、これらはすでに引いたところと重なるものが多く、特に問題にするほどのこともないので省略に従う。

ともあれ、こうした天理本・富岡本を中心とする各篇ごとの検討によって得られた結論がそのまま本文篇にも反映しているわけである。すなわち、そこで紹介されているのは、富岡本五篇及び「妖尼公」以外の天理巻子本すべて（ただし、「歌のほまれ」は解題中に引かれている）、それに冊子本の「二世の縁」「捨石丸」「楠公雨夜がたり」（同腹稿も解題中に引かれている）の全部と「宮木が塚」の末尾、そして「茶神の物語」「鴛央行」である。

そして、この解題における『春雨物語』の最終形についての推測は、やがて出現した文化五年本によって九割まで正しかったことが証明されるのである。それは、秋成研究史上の快挙ともいうべき出来事であったが、問題は、以後この解題の成果が正しく受け継がれ発展させられて行かなかったところにあると思われる。

（c）　文化五年本の出現

昭和二十四年から二十七年にかけて、相次いで、文化五年本の写本が紹介された。最初に出現した漆山本はそれでも「捨石丸」「樊噲」の二篇を欠いていたが、その翌年及び翌々年に出た桜山文庫本・西荘文庫旧蔵本はいずれも完本であった。三者いずれも巻末に「文化五年春三月／瑞龍山下の／老隠戯書／于時歳七十五」という奥書をもっており、成立時期も明確である。

漆山本については、玉井乾介氏「漆山本春雨物語について」（文学　昭和24年1月）に紹介があり、翌年には、岩波文庫の一冊として刊行され、本年（昭和六十年）二月には、青裳堂書店より、日本書誌学大系三十三（別冊）として影印版も刊行されている。玉井氏の論文中には、

漆山氏は本書を春雨の定本と信じ、それが全ての論述の基礎をなしていた。私は氏と同じ結論に到達するためにはまだ多くの疑問が解決されなければならぬと思う。

という一節があって、所蔵者である漆山氏はこの写本を定本（最終稿という意味であろう）とみなしていたのに対して、玉井氏としてはその説には従いがたいと考えていたことが示唆されている。

桜山文庫本発見の経緯は、丸山季夫氏「春雨物語の完本はあった」（国語と国文学　昭和26年3月　『国学者雑攷』吉川弘文館　昭和57年9月刊に収録）に詳しく、同年五月には古典文庫より刊行された。同論文中にもすでに、この桜山文庫本は「秋成の初稿本からの写し」であろうと書かれていたが、古典文庫の解説（『国学史上の人々』　吉川弘文館　昭和54年7月刊に収録）において、この点についてのより詳しい検討がなされている。

然らば五巻本系の春雨物語、漆山本、桜山文庫本の関係はど

うであらう。写本で伝へられた本だけに、皆異同がある。然し、天理本、旧富岡本の五巻本系統の本と、この桜山文庫本及び漆山本との間には、明かに単に伝写の誤りとのみ云ひ得ない異同がある。

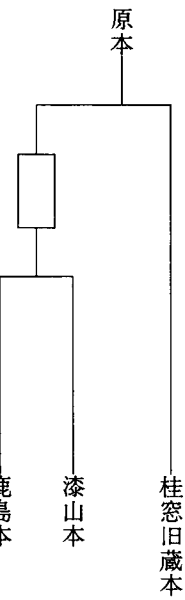
第一話の血かたびらを見ても、「武士よこの橋板の平らけく云々」の歌があって、「これを歌人等七度歌ひ上ぐる」とある後に、「網代の波は今日見ねど」に初まる十四行（名著文庫本）ほどの歌の応答のある文章が、十巻本の桜山文庫本漆山本にはない。此様な十巻本と、五巻本との相違は各説話にある。尤も五巻本にも天理本と旧富岡本との間に、異同があって、富岡本が天理本の補正本であらうと、中村氏も云って居られるから、この桜山文庫本漆山本の原本が先ず成り、次いで天理本、富岡本との推敲が加へられて行ったものかと思はれる。

この他「樊噲」「海賊」の例も引かれているが、興味深いのは、「血かたびら」に関して、文化五年本→天理本（冊子本をさすのであろう）→富岡本という改稿過程が考えられていることである。天理本に関しては中村氏の解題によったらしいのだが、その記述だけでは文化五年本が冊子本に先行するという結論は出てこないはずである。果してどのような根拠によるものなのか、今更故人である著者にうかがうわけにはいかないとはいえ、私自身の結論とも一致しているだけにぜひとも知りたい気がする。

中村幸彦氏もまた天理図書館にはいった西荘文庫旧蔵本の紹介を試みており、古典大系本の底本にも使用している。「典籍」第四号（昭和27年9月）に載った「旧小津桂窓蔵春雨物語について」のなかで氏は、この写本が馬琴の『近世物之本江戸作者部類』に述べられている本であることにふれたあと、文化五年本三種の校合の結果を次のように述べている。

漆山本と鹿島本とは極めて近い関係の同系にあることは、漢字仮名の配合の極似によっても一目でわかる。しかし、漆山本が校訂によって多少末梢部を変へてゐるを考慮に入れても、相違はやはりあって、親子関係よりは兄弟関係と見るべきである。この二書の関係については今細述しない。今度の桂窓本も、内容は、富岡本や、天理図書館蔵の初稿本などとは違って、前二書と同一原本によることは、奥の同一を以ってでも証し得る。が、漢字仮名の配合となると二書に比し漢字が遙に多い。私の経験からすると、桂窓本の方が、秋成の文字遣を伝へてゐる様に思へる。のみならず難読であった文字は、読めぬまゝで形を似させてそのまゝ写してある。文字も一寸秋成に似るが、鹿島本と比較するに、二つ共に誤脱があって、謄写本などではなく、文字遣も改めたのではないかと疑へる所も若干はある。

ともかく、漆山本鹿島本二本のもととなった写本は、国学の素養のかなりに持つ人によって、読み易く書き改められたものであり、桂窓本は、原本の姿を、存しようと云う心持も幾分あって写したものであり、恐らく、それ等は原本から写したものであらう。原本及び三書の関係を図示すれば次の如くでもあらうか。



以下、桂窓本に「死首のゑがほ」とあり、他二本に「死骨の咲顔」とあるのは、原本には「死首の咲顔」とあったであろうことや、細部の字句の異同を比較対照している。

文化五年本三種の本文は浅野三平氏『校註春雨物語』（桜楓社　昭和46年9月刊）などによって対照することができるが、三者の関係について考察したものは中村氏のこの論文だけといってよく、その意味で、著述集にも収められていない短い文章ながら、忘れてならぬものだと思う。

（d）古典文学大系解説

中村氏の手になる岩波版古典文学大系本は、現在でも最も利用されることの多いテキストといえよう。本文・頭注・補注ともに行き届いたものであるが、『春雨物語』の解説に関しては問題がいくつかある。まず、その冒頭に、

この物語は、寛政享和の間から、折にふれて作った短編の集で、度々改稿して、没時もまだ未完成の作品であった。春雨草紙と題し、私に天理冊子本と称したなど、早期の草稿で、不完全ながら保存されるものもある。その中には腹案のみで終り、結局はこの物語から除かれた篇も混じる。それら初期の稿はしばらくおき、秋成の手で、この物語として整備されたもので、今日に残る写本には、次の二種五部が知られている。

と書かれていて、以下、文化五年本三種と最終稿本（富岡本・天理巻子本・田原本）についての解説に続く。つまり、文化五年本出現以後のこの段階でも、依然として冊子本は「早期の草稿」とされているのである。しかし、冊子本すべてをそうみることはできないのではないか、少なくとも、冊子本の「血かたびら」「天津処女」「目ひとつの神」「宮木が塚」等は文化五年本以後の稿であろう、ということを本文の比較を中心にして述べたのが、十年前の私の旧稿（「『春雨物語』の成立―稿本群の検討を通じて―」前出）であった。その結論については、さらにより厳密に立証されねばならないだろうし、細部に関してはなお若干の手直しも必要であろうが、基本的には変更の必要はないと考えている。しかし、この旧稿発表以前はもちろん、それ以後においても、冊子本は必要以上に軽視されてきたと思う。積善館版解題の書かれた昭和二十二年の時点で冊子本を最も初期の草稿とみなすのは自然なことであったとしても、文化五年本の出現以後においてこの問題は当然もう一度改めて検討されねばならなかったはずである。にもかかわらず、従来、冊子本の位置づけに関しては、積善館版解題の記述が通説として扱われ、改めて検討されることもないまま他の研究者にも受け容れられていったのである。

その具体的な例として、昭和三十九年十一月に刊行された高田衛氏の『上田秋成年譜考説』（明善堂書店）中にみえる『春雨物語』関

係の記事を拾っていくと次のようになる。

寛政十一年某月　この年までに、初稿『血かたびら』、同『天津処女』成るか。

寛政十二年八月　この頃までに、『海賊』草稿、『目ひとつの神』草稿があるか。

同　年　秋　加島村に往き、翌年にかけて滞在した。また、この間に『宮木が塚』草稿執筆と推定される。

享和　二年某月　この頃、『春雨物語』草稿本（天理冊子本）成立か。

文化　三年某月　この春までに、『春雨草紙』（草稿）執筆。

文化　五年三月　『春雨物語』（文化五年本）を編成した。

すなわち、ここでも、依然として冊子本は佐藤本に先立つ草稿とされているのである。

また、中村博保氏の「『目ひとつの神』研究」（『近世中期文学の研究』所収　明善堂書店　昭和41年6月刊）でも、対照されるべき本文として取り上げられているのは、富岡本・文化五年本・佐藤本の三種で、冊子本は取り上げられず、そのことに関する言及も全くない。念の為にいっておけば、ごく最近出版された『日本古典文学大辞典』第五巻（岩波書店　昭和59年10月刊）の『春雨物語』（中村博保氏執筆）の項でも、天理冊子本については「初期の腹案を記した」ものとしか書かれていないのである。

高田氏の著書や中村博保氏の論文はいずれも戦後の秋成研究を代表する重要な著作であり、その研究史意義については改めていうまでもないことだと思うが、それだけにいささか残念な気がするのである。本稿の主要な目的の一つとして冊子本の正当な位置づけをめざすということがあるので、私としては、あえてこの点を強調しておきたいのである。

もう一つ、この解説中で取り上げておかねばならないのは、天理巻子本についての記述である。天理巻子本は富岡本とともに最終稿本と称され、「文化五年本より一段と推敲を加えた本文を持つ。文化六年六月没の秋成は、この一年と数月の間にも一度全部を改訂したので、何時の頃とは不明ながら最終稿には相違ない。」という説明がある。巻子本に関する記述を引くと

天理巻子本は三巻。二世の縁・死首のゑがほ・捨石丸・宮木が塚・歌のほまれ・樊噲下を含むが、歌のほまれを除く他は、みな断片で、甚だしきは一片のみである。……巻子本は天理冊子本と共に、羽倉信美の次男重村の入聟した松室家に保存されて来たものである。両者はしかしもと一つであったことが比較すれば明らかである。更に松室家について調査を依頼したが、遺憾ながら、欠ける部分は出現しなかった。

とある。ここでまず気がつくのは、巻子本にあるはずの「妖尼公」が省かれていることである。が、これはあるいは文化五年本に含まれない篇であるために省略されたのかもしれない。しかし、他はいいとしても、巻子本の「二世の縁」を富岡本と同じく最終稿とみなしうるかどうか、大いに疑問を感じるところである。積善館版解題においては「天理巻子本も亦、富岡本に対して佐藤本と同じく、草稿と考えねばならぬ部分もあるかもしれない」と若干の含みが残されていたことを思えば、この解説はいささか断定にすぎるのではな

いかと思われる。

また、底本として用いられなかった「二世の縁」「死首のゑがほ」「捨石丸」の断片は頭注・補注に引用されているわけだが、「捨石丸」の頭注において「天理巻子本に……」として引用されている中には、巻子本だけでなく冊子本も含まれているのである。しかも引用に際しては、すべて巻子本の本文として扱われているのであるから利用する方としては、混乱してしまう。念のため「捨石丸」において「天理巻子本に……」とある頭注すべてについてみておくと、巻子本の本文が引かれているのは、

一九四頁注36
一九八頁注5・15・20

の四例のみ、これ以外の

一九二頁注14・19・23
一九三頁注43
一九四頁注10・25
一九六頁注5・26
一九七頁注29

に引かれているのはすべて冊子本の本文なのである。積善館版の本文篇では脚注で両者は明確に区別されているのであるから、なぜ大系本のみこうなったのかまったく不明というしかない。その意味で、比較的利用されることの多い本であるが、この大系本の解説は諸本研究史という観点から見た場合あまり評価することはできないし、積善館版解題よりも後退しているのではないかとさえ思うのである。

（e）　秋成自筆本集解題

昭和五十年七月刊行の『天理図書館善本叢書第二十六巻秋成自筆本集』（八木書店刊）の解題が中村氏の研究の最後に取り上げるべきものである。

ここで春雨物語の名で収められているのは富岡本と天理巻子本であるが、巻子本として影印されているのは「歌のほまれ」「宮木が塚」「樊噲」「捨石丸」「死首のゑがほ」の五篇であり、その他については、書誌の項に「ただし第三巻にある妖尼公五葉、同一葉、二世の縁一葉は不採用」という注記がある。とすれば、巻子本がすべて最終稿であるという大系本の解説は訂正されたと考えていいのであろうか。また「捨石丸」として影印されているのも巻子本所収の三葉分だけで冊子本は含まれていない。いずれも妥当な処置と思われるが、それだけにいっそう大系本の処置の不可解さはきわだつのである。

（4）　佐藤本の紹介

（1）でのべたごとく、佐藤本は早くから知られていたにもかかわらず、本格的な紹介は最も遅れた。ここで、浅野三平氏の「佐藤本『春雨物語』の検討」（国語と国文学　昭和43年3月）及び「続佐藤『春雨草紙』の検討―いわゆる「壬申の乱」その他について―」（近世文芸　第16号　昭和44年6月　なお、二篇とも『上田秋成の研究』桜楓社　昭和60年2月刊に収録）における紹介を見ておくことにし

よう。

前者では、山形県酒田市在住の佐藤三郎氏蔵の秋成自筆草稿が佐藤春夫によって発見された経過を記したのち、昭和十七年の新聞記事に西福寺の襖の下貼りから出現したものとあるのは間違いで、所蔵者や西福寺住職の談話などから「秋成が晩年を過ごした庵のある南禅寺雑掌磯貝家の襖の下貼りから出たもの」(磯貝が磯谷の誤りであることは、拙稿「磯谷台陽翁遺文」金沢大学国語国文　第9号　昭和58年3月を参照のこと)とすべきであることを述べる。それゆえ、従来のように文化二～三年にかけての西福寺居住時代に書かれた反古とはいえなくなるわけで、浅野氏は、なかに寛政四年十二月の日付のあるメモ(自筆にあらず)や寛政十二年頃「河内の日下の里」に滞在したことを記すもの、さらに文化四年成立の「毎月集」についての記事があることなどから、秋成が寛政五年六月京に移住して以後死ぬまでに書かれた草稿・反古の類であるとして、時期は特定していない。

この百十枚に及ぶ反古のうち「春雨草紙」と認められるのは五十二枚分で、そこに含まれるのは「血かたびら」「天津処女」「目ひとつの神」「捨石丸」「歌のほまれ」「長者長屋」「茶神の物語」の七篇である。以下、各篇についての氏の記述を箇条書にまとめておく。

1、「血かたびら」には二種の稿があり、重複する部分の比較から、巻頭に「此巻病によりて筆とゝめしかと／次ニ仁明の御代まて思ふ／旨を作りかたるへし」とある方(B系)がより早く、「春雨草紙　一の巻　血かたびら」ではじまる方(A系)はそれより推敲を経たものである。

2、「天津処女」にも二種の稿があり、一方の書き出しには「□まつ乙女　第二」とあるが、「血かたびら」のように重複する部分はない。

3、「目ひとつの神」は書き出しの紙の裏面に「目一つの神　二」とあって「未だこの時期には巻之二に位置しようとする試みがあった」ことがわかる。内容的には、「一番の草稿」といえるが、「文化五年本などより、目ひとつの神の議論が多くて長いのが特徴であって、秋成は、『春雨草紙』執筆の時点に於ては、春雨物語の特徴である歴史物語に於ける文化批判と云ったものを、より強く、長くこころみていたのである。」

4、「捨石丸」では、子供の名が「小伝」で姉の名はないなど、人物設定に見られる違いから初稿であることがわかる。

5、「歌のほまれ」は、「残された二枚の内容の密度から推定してみると、かなり長い構成を持っていたと考えられる。」

以上の検討結果から、各篇いずれも文化五年本よりも早い時期に書かれた最も初期の草稿と考えられているわけである。このあと、佐藤本のみにみられる「長者長屋」の全文が翻刻されているが、その部分については特に言及すべきことはない。

この紹介に関しては、佐藤本の初稿としての性格が明らかにされたことがなによりも重要である。また、「目ひとつの神」が第二番目に位置したことがあったことや「歌のほまれ」がかなり長い内容であったらしいことの指摘も『春雨物語』の成立過程を考える上では見逃すことはできない。ここで紹介された草稿のうち「長者長屋」「茶神の物語」を除く各稿は浅野氏編『春雨物語　付春雨草紙』(桜楓

社　昭和58年4月）によって容易に見ることができる。

これ以外の、いわゆる「壬申の乱」に関する稿は続編に紹介されているわけだが、こちらに関しては、有力な修正意見が出されている。長島弘明氏「『目ひとつの神』の原型」（日本文学　昭和58年5月）がそれで、氏はここで、浅野氏が物語的文章として紹介したもの大部分に若干の未紹介のものを加えた稿について、これらはすべて「目ひとつの神」の草稿ではなかったかとして、その復元を試みているのである。この意見に関しては、浅野氏自身も『上田秋成の研究』において「注目すべき新見」と評している。細部に関してはなお詳しい検討が必要であろうが、基本的方向としては正しいであろうと私も思う。よって、浅野氏の続編の方については、これ以上詳しくふれないことにする。ただ、念のために言っておくと、長島氏はこの続編に紹介されている文章すべてを「目ひとつの神」の草稿としているわけではなく、（D）（F）（イ）（ロ）の記号を附された各文は含まれてはいない。これらのうちにも、何かの物語の一部をなしていると思われるものがあり、未紹介の反古などもあわせなお検討していく必要があろう。

（4）　各篇についての検討

以上、『春雨物語』の稿本すべてについて従来の研究をみてきたわけであるが、これら各稿本の関係について各作品ごとに検討した研究もいくつかみられる。以下それらについてにみて行こうと思うが、それに先立って、旧稿（「『春雨物語』の成立―稿本群の検討を通して―」前出）のなかで提出した私自身の考えを簡単に表にしてまとめておきたい。以下の検討において私自身の説との異同はどうしても問題にせざるを得ないからであり、また私自身、前にも述べた通り、細部においてはなお検討すべき問題は残っているものの、基本的には特に訂正する必要はないと考えているからである。

序	冊子本→文化五年本→富岡本
血かたびら	佐藤本B→同A→文化五年本→冊子本→富岡本
天津処女	佐藤本→文化五年本→冊子本→富岡本
海賊	冊子本→文化五年本→富岡本
二世の縁	巻子本→文化五年本→冊子本
目ひとつの神	佐藤本→文化五年本→冊子本→富岡本
死首のゑがほ	文化五年本→巻子本
捨石丸	佐藤本→冊子本→文化五年本→巻子本
宮木が塚	文化五年本→冊子本→巻子本
歌のほまれ	佐藤本→文化五年本→天理巻子本
樊噲上	冊子本→文化五年本→富岡本
樊噲下	文化五年本→巻子本

以上の通りであるが、このなかには、ほぼ間違いないというのもあれば、不確かながらとりあえずそう決めておいた、というのも含まれる。そうした点は以下の検討においても明らかになるはずだが、できるだけ自説にこだわらず諸家の説をみていくことにしたい。

（a）二世の縁

「二世の縁」は、文化五年本・天理巻子本・同冊子本に稿が残っているが、この三者の関係については浅野三平氏・八田雅広氏に研究がある。

浅野氏は「春雨物語『二世の縁』攷」（女子大国文　第35号　昭和39年10月『上田秋成の研究』前出に収録）において、まず冊子本三十七ウの二行分について「平仮名が多く、書体は崩れていて、現存のなかでは一番の草稿」であるとする。さらに、冊子本の三十六ウから三十七ウまでの一丁余りに関しては

かなり丁寧な筆蹟である。しかし、文化五年本と較べて見ると、母親の会話は、はるかに五年本の方が迫力があるし、又、鉦の音に気がつくまでは、……云う迄もなく文化五年本の方が、磨かれた簡潔な文章となっている。つまり、自筆本の方には、草稿としか考えられないような粗雑な筆の走りを感ずるのである。

とのべている。また、巻子本の一葉についても「前記の冒頭の一丁余りの部分と、全く同じ筆蹟であり、墨の色も紙質も同じもの」であり、内容的にも「大変冗漫なもの」であって、結局、冊子本・巻子本にある「二世の縁」はいずれも「同じ時期に秋成によって書かれた」文化五年本以前の稿であると結論づけるのである。

一方、八田氏は、「春雨物語『二世の縁』―成立過程と構想の変化―」（柴のいほり　第7号　昭和47年3月）において、古典文学大系解説と浅野氏の説の両者をふまえながら独自の比較を試みている。そして、冊子本と文化五年本に関しては、

内容には全くといってよいほど異同がないのだが、登場する読書家の描写が、冊子本では、使用人が多くいて裕福に暮らしている、とのみ抽象的に表現されているにすぎないのが文化五年本では、耕作地をたくさん所有している豪農である、という具体的な表現になっている。また、母親の諌めの言葉に、「いとかたじけなく」思って、亥の刻を過ぎると寝るのを「大事とし」たという表現に、読書家の性格描写がみられる文化五年本に対し、冊子本にはそれがみられない。

などの例を挙げつつ「冊子本の文章が推敲されて文化五年本の文章になったのは明らかである」と結論づけている。また、巻子本と文化五年本の関係についても、文化五年本の方が「表現が豊富」であり、巻子本にある三首の和歌も文化五年本において「意図的に取り除いた」ものと推測されることなどからこれも文化五年本に先立つ草稿であるとするのである。ただし、八田氏は冊子本・巻子本が同時に書かれたものか否かについてはふれていない。

結局、両氏は冊子本・巻子本を文化五年本に先立つ稿とみなす点では一致しているわけである。しかし、私の考えは両氏とは若干異なる。巻子本を初期の草稿とみなすのは同じだが、これ以後、文化五年本→冊子本というプロセスで改稿されたと考えるのである。この説の根拠は、冊子本「二世の縁」の直前にあり、用紙の使い方からみて同じ時期に続けて書かれたと思われる「目ひとつの神」が、本文の比較の結果からは文化五年本以後の稿と考えられることによ

る。ただ、私は両氏のごとく双方の本文を比較して結論を導いたわけではないので、その点いささか説得力を欠くかもしれない。しかしまた、両氏の結論も印象批評にすぎないといえばいえるわけで、私を完全に納得させるものとはいいがたい。冊子本に残る部分が少ないうえに、他の作品のように最終稿を基準にして比較するということもできないので、本文の比較だけでは決め手にならないという面はたしかにあるのだが、そうであるがゆえにこそ、ある程度客観性のある本文比較の方法論を確立する必要があるともいえる。いずれ、そういった問題も含めて各稿本についての詳細な比較検討を試みる予定なので、この問題はその時まで課題として残して置きたいと思う。

（b）捨石丸

「捨石丸」に関しても前項の「二世の縁」と同様の問題がある。すなわち、浅野三平氏は、「春雨物語『捨石丸』の方法」（国語と国文学　昭和46年10月　『上田秋成の研究』前出に収録）において、佐藤本→巻子本・冊子本（浅野氏は両者を天理本として一括している）→文化五年本という改稿のプロセスを考えているが、私は、佐藤本→冊子本→文化五年本→巻子本というプロセスを考えたのである。ただし、浅野氏が天理本として文化五年本と比較している箇所の大部分は冊子本であり、巻子本に関係するのは、

捨石を仇とねらう「小伝次」の表現についても、天理本では仇に会った時にすぐ、「習ひ得たる術見よ」と修行した術を誇るのを、牛若丸になぞらえて捨石丸が誉めちぎったりして、まことに通俗的表現になっている。これに対し「五年本」では、この欠点を補い、ある日、捨石丸より「骨よわく力なければ、こしぬけたる我をもえ打ちたまはじ」と云われ、初めて傍の大石を蹴ると鞠の如く転がったと云うのであり、忍耐強い「小伝次」の心理を深く描き、内面描写に勝れている。

と述べられた箇所だけである。しかし、こうした主観的な印象による比較だけでは積極的な根拠とはなり得ないと思う。全く別の感じ方もありうると思うからである。とはいっても、私自身も「巻子本の方が大体において増補されているようである」という程度の理由しか示しておらず、いずれにしても根拠薄弱といわざるをえないようである。佐藤本、冊子本、文化五年本に関しての見解は両者一致しているのであるが、巻子本に関しては、残された分量が少ないために「二世の縁」の場合と同じくやはり決め手を欠くのである。この問題についても今後の課題として残す他なさそうである。

（c）目ひとつの神

前出の中村博保氏「『目ひとつの神』研究」もここに取り上げておくべきである。氏はここで定稿富岡本と草稿文化五年本の本文の比較を中心に置き、参考として佐藤本を利用するというかたちをとっている。冊子本が無視されたことに対する不満はあるものの、草稿・定稿の比較を通して作品論を展開して行くその方法は、『春雨物語』研究史上極めて高い意義を持っている。ただ、佐藤本草稿が長島氏

の指摘にある如く「歌のほまれ」や壬申の乱に関する内容をも含むものだとすれば、この作品の成立過程については再度の検討が必要であろう。この作品についても残された問題は多いのである。

（d）冒頭三篇

成城大学近世ゼミナール会報「近世レポート」創刊第一号（昭和58年3月）に掲載された奥沢一恵氏の「読本の研究　『春雨物語』冒頭三篇」は、卒業論文の抄録ということであるが、「血かたびら」「天津処女」「海賊」の三篇について、「現存する各草稿と伝本を比較検討し、そこから得られた推敲過程から作者秋成の意図を探る」という注目すべき内容をもっている。ここでは、佐藤本春雨草紙・天理冊子本（この二つは原本の写真コピーを利用）・文化五年本・富岡本の四種を資料として用い、第一章で佐藤本・天理冊子本について解説し、第二章で三篇それぞれについて「典拠と推敲過程からの考察」を試みている。

このうち、佐藤本「血かたびら」に細字と太字の二種があり「互いに重複する部分を比較検討した結果、細字の草稿が先に成立し、次いで太字へと推敲された」と考えるのは浅野氏と同じである。しかし、同「天津処女」にも細字と太字の二種があり、これも、細字の稿から太字の稿へと推敲されていると述べているのは浅野氏とは異なる。浅野氏は二種あることを指摘するだけで、重複する部分がないために両者の先後関係には言及していないのだが、奥沢氏の場合いかなる根拠によるものなのかこれだけではよくわからない。

また、天理冊子本の各篇については次のように重複部分についてくわしく説明している。

「血かたびら」

途中ところどころ欠けている部分があるので、一篇全体にわたってか、それとも部分的なものか断定できないが、数行にわたる重複を経て推敲されていることから、数度の推敲が繰り返されたものと思われる。

「天津処女」

この篇も途中欠けている部分がみられる。一篇の前半部分に重複する部分がみられ、数度にわたる推敲が為されたものと思われる。同部分に対して、三種類の推敲がみられるところもある。

「海賊」

この篇は、中間部分がほとんど欠けているが、現存するうち、最後の部分に重複するところがみられる。

しかし、ここまで詳しく重複部分があることにふれるのであれば、本当はその程度―たとえば、佐藤本「血かたびら」の如くはっきりと先後関係を指摘できるものか否かなど―についても言及する必要があろう。私自身は（2）でのべたように、基本的には同時期における異文とみておけばいいと思っているが、この点についての奥沢氏の見解は第二章以下においても記されてはいなかった。

この論文の第一章では、各草稿についての解説のみで、それらの相互関係についてはふれられていない。第二章でもこの点は正面きって取り上げられているわけではないが、推敲過程についての考

察のなかでおのずから明らかになってくるものもある。以下、その点にふれておこう。

「血かたびら」に関しては、佐藤本（浅野氏のいわゆるB系の方、奥沢氏はAとする）と富岡本の比較が中心であるので、特に問題となる点は見いだせない（両者の比較の結果やそれに関する考察等の具体的な内容については、ここではふれないでおく）。次の「天津処女」については、四種の稿の関係に言及した箇所がある。

各草稿に、かなり欠けている部分が多いために、各草稿の比較から大幅な推敲がみられたのは、……淳和のきさいの宮をめぐって、梅宮のまつりと承和の変に関する場面である。この場面の草稿は、春雨草紙ABともに欠けており、天理冊子本も前半部分が欠けている。しかし、天理冊子本では、後半部分から、ほぼ、最終稿本に近い形であったことが想像される。このことから、一度天理冊子本の段階で描いたものを、文化五年本の段階で推敲したが、再び最終稿本に至って、もとの形に落ちついていることがわかる。

すなわち、富岡本と天理冊子本が近く、文化五年本がやや離れた関係にある箇所について、奥沢氏は、冊子本を推敲して文化五年本のように直したが、富岡本において再び冊子本の状態にもどしたと考えているわけである。しかし、富岡本と冊子本が近い関係にあり、文化五年本はやや遠いというこのような箇所は、「血かたびら」「天津処女」には他にも数多くあることからすれば、このように考えるのはやはり不自然であって、文化五年本から天理冊子本、富岡本という順で改稿されていったと考えた方が自然であると思う。奥沢氏には、天理冊子本は文化五年本以前の草稿という先入観があったためにこうした不自然な改稿過程を考えることになったようである。三番目の「海賊」については、海賊の語りはじめの部分の比較から天理冊子本→文化五年本→富岡本というプロセスが考えられており、この点に関しては、私自身の考えとも一致する。

全体として奥沢氏の論は、いくらか未熟なところや先行文献を充分に参照していないなどの欠点はあるものの、一般の卒業論文のレベルをはるかに超えたものであることは間違いない。今回はふれなかった各篇の改稿過程に関する考察についても、いずれ機会を改めて検討したいと思う。

（e）　天津処女

この項の最後に取り上げるのは、勝倉寿一氏の「『天津処女』論」（愛媛大学教養部紀要　第16号　昭和58年12月）である。氏はその冒頭において

「天津処女」の文芸的諸性質の分析や価値の決定が、作者の最終的な創作意志の結晶であり、他の稿本と比べて内容の統一が保たれ、芸術的価値の高い最終稿本（富岡本）によってなされるべきことは言うまでもない。しかし、その内容の分析にあたっては、諸稿本間の先後関係の決定と、それを踏まえた取捨・改変・付加などの推敲過程や構想の移動、秋成の人物造型、政治・文化史観の投影、及び歴史離れの様相などを明らかにし、最終稿本に定着するまでの作者の創作意志の展開を把握しておくこ

とが是非とも必要である。

と述べ、諸稿本の関係について従来の諸説を踏まえつつ、みずからの立場を明らかにしている。ここでは、中村幸彦氏の説及びそれを踏襲した高田氏『上田秋成年譜考説』の説と私自身の説とが主に検討されているのであるが、以下にその結論の要点を書き抜いておく。

佐藤本「天津処女」を連続した草稿と見れば、……前半部相当部分は散逸したのか極めて少ないが、……後半部は以後の稿本の原型をなしている。「天津処女」に関する限り、作品の基本的な骨組を把握しうる初稿的な性格が濃厚に認められるのである。

また、佐藤本と文化五年本には多くの点で表現の近似性が認められ、天理冊子本と富岡本は表現の細部に至るまで酷似している。従って、木越氏の推定通り、天理冊子本は文化五年本として完成した作品に対する秋成の新たな創作意欲の存在を証するものであるとともに、文化五年本とは、異なる史観や構想の導入を推測させることになる。

更に、「天津処女」の稿本と同じく平安初期の政治に対する史観を形象化した「血かたびら」との近接関係が注目される。……「天津処女」の想の胚胎をめぐっては、佐藤本の初期草稿では「血かたびら」の一部をなしていた「仁明の御代」の部分が、佐藤本の後期草稿では分離して独立した一篇をなしたと見る木越氏の推定がある。いま、現存の佐藤本「天津処女」以前の内容は想定し難いが、富岡本の形に定着する過程で、「血かたびら」と内容の連続した性格と、共通の史観に貫かれていたであろうことは確認されなければなるまい。

このように、勝倉氏は私の説に全面的な賛意を表明しているわけで、これ以上私としても付け加えることはない。このあと氏は各稿本の間に見られる改稿の問題を取り上げており、それらは充分に検討に値するものであるが、その一々についてここで取り上げることはできないので、これも前項と同じく機会を改めることにしたい。

三、まとめと今後の展望

以上で『春雨物語』の諸稿本に関する従来の研究について、私の目に触れた限りのものは取り上げたつもりである。あるいは見落しがあるかもしれないが、その点については御教示いただければ幸いである。

さて、こうして『春雨物語』の諸本についての研究を見てくると昭和四十年前後がひとつの区切りとなるように思われる。各稿本の紹介の終わるのがこの頃であり、各篇ごとの本文に即した検討が始まるのもこの頃からである。それは『春雨物語』研究全体の動向を反映するものであろうが、しかし、改稿の問題を作品研究に取り入れている例は、みられるごとく非常に少ない。作品研究にとって、本文の成立過程をたどることはきわめて基礎的な作業であるはずだが、そのことはまだまだ共通の前提とはなっていないのである。その意味で、この方面に関しては、まだ研究史と呼び得るだけの蓄積はないというべきなのかもしれない。

たしかに、つい最近まで、佐藤本や冊子本の本文を知るためには

直接原本にあたるしかなかったのであるから、この方面の研究があまり行われなかったことにもやむをえない面はある。それゆえ、研究環境の整備ということは、今後とも大切な課題といえる。未翻刻資料の活字化や影印等はこれからも続けられねばならないし、既翻刻のものについても読みに問題のある箇所はいくつかあるわけで、それらについても、広く検討して行く必要があると思う。また、これに関連して、各草稿の執筆時期を考えていくためには、どうしても秋成の筆跡の問題にふれざるを得ないであろう。私自身はこれまでこの問題を意識的に避けてきたのであるが、今後はそうであってはならないと思う。むずかしいことかもしれないが、筆跡の問題に関しても、ある程度客観的に語り得るだけの基盤づくりを目指す必要があると思う。

私としては、各篇の改稿箇所それぞれについて、各研究者の述べるところを一々検討しながらその当否を問題にしていく、というかたちで研究史を書くことが早く可能になってほしいと思っているのだが、改稿過程を問題にする論文が各作品について一篇あるかどうかという現状ではそれは望むべくもない。そのため、本稿においては、結局、各稿本の先後関係―特に、冊子本及び巻子本をどう位置づけるか―にのみ焦点を合わせることになってしまった。もちろん、まず、こうした問題を解決しておかなければ現状から一歩も先へ進めないと思ったからであり、また、対立する説が存在するにもかかわらず、そのことが共通の認識とならずうやむやのまま放置されている現状への不満もあって、あえて私は、対立点や問題点を明確にし、今後の共通の検討課題として残そうとしたのである。その意味で、本稿は改稿過程を研究していくための共通の土俵づくりを目指したものといっていいかもしれない。

むろん、改稿過程の研究が単に各稿本の先後関係についての研究であっていいはずがない。究極の課題は、そうして選び取られ、あるいは削り取られるという過程を経た言葉によって形成されている『春雨物語』という作品世界そのものであり、素材研究その他の成果を取り入れつつその世界を解明していくこと以外にはないのである。私自身は、以後、本誌上でそうした試みを続けていくつもりであるが、こうした作業は本当はできるだけ多くの人によってなされることが望ましい。改稿過程の研究に関しては、まだこれといって確立した方法が存在するわけではないので、様々の方法によるアプローチが可能なはずだからである。そして、本稿がそのために少しでも役に立てば幸いであると思う。

付記

本稿成稿後、深沢秋男氏編『桜山本　春雨物語』（勉誠社　昭和61年2月刊）が刊行された。墨筆と朱筆を区別した影印篇及びそれに基づいて文化五年本三種の原形について考察した研究篇はともに『春雨物語』の本文研究史上画期的なものと思われる。今後、文化五年本の本文を利用するにあたって本書の成果を無視することはできないであろうし、他の稿本の研究にとっても方法的に大きな影響を与えるものと思われる。本文中には取り入れることができなかったので、あえて、付記しておく次第である。